

DHARMA

お し え

第一章 因縁

第一節 四つの真理

一、この人間世界は苦しみに満ちている。生も苦しみであり、老いも病も死もみな苦しみである。怨みあるものと会わなければならないことも、愛するものと別れなければならないことも、また求めて得られないことも苦しみである。まことに、執着を離れない人生はすべて苦しみである。これを苦しみの真理〔苦諦〕という。

この人生の苦しみが、どうして起るかという、それは人間の心につきまとう煩惱から起ることは疑いない。その煩惱をつきつめていけば、生まれつきそなわっている激しい欲望に根ざしていることがわかる。このような欲望は、生に対する激しい執着をもととしていて、見るもの聞くものを欲しがる欲望となる。また転じて、死をさえ願うようにもなる。これを苦しみの原因〔集諦〕という。

この煩惱ぼんのうの根本を残りなく滅めつぼし尽くし、すべての執着しゅうじやくを離れば人間の苦しみもなくなる。これを苦しみを滅めつぼす真理めつたい〔滅諦〕という。

この苦しみを滅めつぼし尽くした境地に入るには、八つの正しい道はつしやうどう（八正道）を修めなければならぬ。八つの正しい道というのは、正しい見解、正しい思い、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶、正しい心の統一である。これらの八つは欲望を滅めつぼすための正しい道の真理しやうたい〔道諦〕といわれる。

これらの真理を人はしっかり身につけなければならぬ。というのは、この世は苦しみに満ちていて、この苦しみから逃れようとする者はだれでも煩惱を断ち切らなければならぬからである。煩惱と苦しみのなくなった境地は、さとりによってのみ到達し得る。さとりはこの八つの正しい道によつてのみ達し得られる。

二、道に志す人も、この四つの聖とうとい真理を知らなければならぬ。これらを知らないために、長い間、迷いの道にさまよつてやむとぎがない。この四つの聖い真理を知る人をさとの眼を得た人という。

だから、よく心一つにして*仏ほとけの教えを受け、この四つの聖い真理とうとの道理を明らかに知らなければならぬ。いつの世のどのような聖者も、正しい聖者であるならば、みなこの四つの聖い真理をさとした人であり、四つの聖い真理を教える人である。

この四つの聖い真理が明らかになったとき、人は初めて、欲から遠ざかり、世間と争わず、殺さず、盗まず、よこしまな愛欲を犯さず、欺あざむかず、そしらず、へつらわず、ねたまず、瞋いからず、人生の*無常むじょうを忘れず、道にはずれることがない。

三、道を行うものは、例えば、灯火ともしびをにかけて、暗黒の部屋に入るようなものである。闇やみはたちまち去り、明るさに満たされる。

道を学んで、明らかにこの四つの聖い真理を知れば、*智慧ちえの灯火を得て、無知の闇は滅びる。仏は単にこの四つの真理を示すことによって人びとを導くのである。教えを正しく身に受けるものは、この四つの聖い真理によって、はかないこの世において、まことのさとりを開き、この世の人びとの守りとなり、頼りとなる。それは、この四つの聖い真理

が明らかになれば、あらゆる煩惱ぼんのうのもとである*無明むみょうが減へびるからである。

ほとけ 仏の弟子たちはこの四つしつとの聖い真理によって、あらゆる教えに達し、すべての道理を知る智慧ちえと功德くどくとをそなえ、どんな人びとに向かつて、自在に教えを説くことができる。

第二節 不思議なつながり

一、人びとの苦しみには原因があり、人びとのさとりに道があるように、すべてのものは、みな縁えん（条件）によって生まれ、縁によって滅めつびる。

雨の降るのも、風の吹くのも、花の咲くのも、葉の散るのも、すべて縁によって生じ、縁によって滅めつびるのである。

この身は父母を縁として生まれ、食物によって維持され、また、この心も経験と知識とによって育ったものである。

だから、この身も、この心も、縁によって成り立ち、縁によって変わるといわなければならぬ。

網の目が、互いにつながりあつて網を作っているように、すべてのものは、つながりあつてできている。

一つの網の目が、それだけで網の目であると考えらるならば、大きな誤りである。

網の目は、ほかの網の目とかかわりあつて、一つの網の目といわれる。網の目は、それぞれ、ほかの網が成り立つために、役立っている。

二、花は咲く縁が集まつて咲き、葉は散る縁が集まつて散る。ひとり咲き、ひとり散るのではない。

縁によつて咲き、縁によつて散るのであるから、どんなものも、みなうつり変わる。ひとりで存在するものも、常にとどまるものもない。

すべてのものが、縁によつて生じ、縁によつて滅びるのは永遠不変の道理である。だから、うつり変わり、常にとどまらないということは、天地の間に動くことのないまことの道理であり、これだけは永久に変わらない。

第三節 ささえあつて

一、それでは、人びとの憂うれい、悲しみ、苦しみ、もだえは、どうして起こるのか。つまりそれは、人に執着しめうじやくがあるからである。

富とみに執着し、名譽利欲に執着し、悦楽に執着し、自分自身に執着する。この執着から苦しみ悩みが生まれる。

初めから、この世界にはいろいろの災いがあり、そのうえ、老いと病と死とを避けることができないから、悲しみや苦しみがある。

しかし、それらもつきつめてみれば、執着があるから、悲しみや苦しみとなるのである。執着を離れさえすれば、すべての悩み苦しみはあとかたもなく消えうせる。

さらにこの執着を押しつめてみると、人びとの心のうちに、*無明むみやうと貪愛とんあいとが見いだされる。

無明はうつり変わるものですがたに眼が開けず、因果の道理に暗いことである。

貪愛とは、得ることのできないものを貪って、執着し愛着することである。

もともと、ものに差別はないのに、差別を認めるのは、この無明と貪愛とはたらしきである。もともと、ものに良否はないのに、良否を見るのは、この無明と貪愛とはたらしきである。

すべての人びとは、常によこしまな思いを起して、愚かさのために正しく見ることができなくなり、自我にとらわれて間違つた行いをし、その結果、迷いの身を生ずることになる。

*業を田とし心を種とし、無明の土に覆われ、貪愛の雨でうるおい、自我の水をそそぎ、よこしまな見方を増して、この迷いを生み出している。

二、だから、結局のところ、憂いと悲しみと苦しみと悩みのある迷いの世界を生み出すものは、この心である。

迷いのこの世は、ただこの心から現われた心の影にほかならず、さとりの世界もまた、この心から現われる。

三、この世の中には三つの誤った見方がある。もしこれらの見方に従ってゆくと、この世のすべてのことが否定されることになる。

一つには、ある人は、人間がこの世で経験するどのようなことも、すべて運命であると主張する。二つには、ある人は、それはすべて神のみ業わざであるという。三つには、またある人は、すべて因も縁もないものであるという。

もしも、すべてが運命によって定まっているならば、この世においては、善いことをするのも、悪いことをするのも、みな運命であり、幸・不幸もすべて運命となって、運命のほかには何ものも存在しないことになる。

したがって、人びとに、これはしなければならぬ、これはしてはならないという希望も努力もなくなり、世の中の進歩も改良もないことになる。

次に、神のみ業わざであるという説も、最後の因も縁もないとする説も、同じ非難があげられ、悪を離れ、善をなそうという意志も努力も意味もすべてなくなってしまう。

だから、この三つの見方はみな誤っている。どんなことも縁によつて生じ、縁によつて滅びるものである。

第二章 人の心とありのままの姿

第一節 変わりゆくものには実体がない

一、身も心も、*因縁いんねんによってできているものであるから、この身には実体はない。この身は因縁の集まりであり、だから、*無常むじょうなものである。

もしも、この身に実体があるならば、わが身は、かくあれ、かくあることなかれ、と思つて、その思いのままになし得るはずである。

王はその国において、罰すべきを罰し、賞すべきを賞し、自分の思うとおりにすることができる。それなのに、願わないのに病み、望まないのに老い、一つとしてわが身についてと思うようになるものはない。

それと同じく、この心にもまた実体はない。心もまた因縁の集まりであり、常にうつ

り変わるものである。

もしも、心に実体があるならば、かくあれ、かくあることなかれ、と思つて、そのとおりにできるはずであるのに、心は欲しないのに悪を思い、願わないのに善から遠ざかり、一つとして自分の思うようにはならない。

二、この身は永遠に変わらないものなのか、それとも無常むじょうであるのかと問うならば、だれも無常であると答えるに違いない。

無常なものは苦しみであるのか、楽しみであるのかと問うならば、生まれた者はだれでもやがて老い、病み、死ぬと気づいたとき、だれでも、苦しみであると答えるに違いない。

このように無常であつてうつり変わり、苦しみであるものを、実体である、わがものである、と思うのは間違つてゐる。

心もまた、そのように、無常であり、苦しみであり、実体ではない。

だから、この自分を組み立てている身と心や、それをとりまくものは、我^がとかかわがものとかという観念を離れたものである。

*智慧^{ちえ}のない心が、我である、わがものであると執着^{しゅうじやく}するにすぎない。

身もそれをとりまくものも、縁によって生じたものであるから、変わりに変わって、しばらくもとどまることがない。

流れる水のように、また灯火^{とうしび}のようにうつり変わっている。また、心の騒ぎ動くこと猿^{さる}のように、しばらくの間も、静かにとどまることがない。

智慧あるものは、このように見、このように聞いて、身と心とに対する執着を去らなければならぬ。心身ともに執着を離れたとき、さとりが得られる。

三、この世において、どんな人にもなしとげられないことが五つある。一つには、老いゆく身でありながら、老いないということ。二つには、病む身でありながら、病まないということ。三つには、死すべき身でありながら、死なないということ。四つには、

滅ぶべきものでありながら、滅びないということ。五つには、尽きるべきものでありながら、尽きないということである。

世の常の人びとは、この避け難いことにつき当たり、いたずらに苦しみ悩むのであるが、^{ほとけ}仏の教えを受けた人は、避け難いことを避け難いと知るから、このような愚かな悩みをいただくことはない。

また、この世に四つの真実がある。第一に、すべて生きとし生けるものはみな^{むみやう}無明から生まれること。第二に、すべて欲望の対象となるものは、^{むじやう}無常であり、苦しみであり、うつり変わるものであること。第三に、すべて存在するものは、^{むじやう}無常であり、苦しみであり、うつり変わるものであること。第四に、^が我も、わがものもないということである。すべてのものは、みな無常であつて、うつり変わるものであること、どのようなものにも我がないということは、仏がこの世に出現するとしなにかかわらず、いつも定まっているまことの道理である。仏はこれを知り、このことをさとつて、人びとを教え導く。

第二節 心の構造

一、迷いもさとりも心から現われ、すべてのものは心によって作られる。ちようど手品師が、いろいろなものを自由に現わすようなものである。

人の心の変化には限りがなく、そのはたらきにも限りがない。汚れた心からは汚れた世界が現われ、清らかな心からは清らかな世界が現われるから、外界の変化にも限りがない。

絵は絵師によって描かれ、外界は心によって作られる。ほとけ仏の作る世界は、ほんのう*煩惱を離れて清らかであり、人の作る世界は煩惱によって汚れている。

心はたくみな絵師のように、さまざまな世界を描き出す。この世の中で心のはたらきによって作り出されないものは何一つない。心のように仏もそうであり、仏のように人びともそうである。だから、すべてのものを描き出すということにおいて、心と仏と人びとと、この三つのものに区別はない。

すべてのものは、心から起こると、ほとけ仏は正しく知っている。だから、このように知る人は、真実の仏を見ることになる。

二、ところが、この心は常に恐れ悲しみ悩んでいる。すでに起こったことを恐れ、まだ起こらないことをも恐れている。なぜなら、この心の中に*無明むみょうと病的な愛着とがあるからである。

この貪りむさぼの心から迷いの世界が生まれ、迷いの世界のさまざまな*因縁いんねんも、要約すれば、みな心そのものの中にある。

生も死も、ただ心から起こるのであるから、迷いの生死ししょうじにかかわる心が滅びると、迷いの生死は尽きる。

迷いの世界はこの心から起こり、迷いの心で見るので、迷いの世界となる。心を離れて迷いの世界がないと知れば、汚れを離れてさとりを得るであろう。

このように、この世界は心に導かれ、心に引きずられ、心の支配を受けている。迷い

の心によって、悩みに満ちた世間が現われる。

三、すべてのものは、みな心を先とし、心を主とし、心から成っている。汚れた心でものを言い、また身で行うと、苦しみがその人に従うのは、ちょうど牽く牛に車が従うようなものである。

しかし、もし善い心でものを言い、または身で行うと、楽しみがその人に従うのは、ちょうど影が形に添うようなものである。悪い行いをする人は、その悪の報いを受けて苦しみ、善い行いをする人は、その善の報いを受けて楽しむ。

この心が濁ると、その道は平らでなくなり、そのために倒れなければならない。また、心が清らかであるならば、その道は平らになり、安らかになる。

身と心との清らかさを楽しむものは、悪魔の網を破って仏の大地を歩むものである。心の静かな人は安らかさを得て、ますます努めて夜も昼も心を修めるであらう。

第三節 眞実のすがた

一、この世のすべてのものは、みな縁によって現われたものであるから、もともとちがいはない。ちがいを見るのは、人びとの偏見である。

大空に東西の区別がないのに、人びとは東西の区別をつけ、東だ西だと執着する^{しゅうじやく}。

数はもともと、一から無限の数まで、それぞれ完全な数であつて、量には多少の区別はないのであるけれども、人びとは欲の心からはからつて、多少の区別をつける。

もともと生もなければ滅もないのに、生死の区別を見、また、人間の行為それ自体には善もなければ悪もないのに、善悪の対立を見るのが、人びとの偏見である。

^{ほとけ} 仏はこの偏見を離れて、世の中は空に浮かぶ雲のような、また幻のようなもので、捨てるも取るもみなむなしいことであると見、心のはからいを離れている。

二、人ははからいから、すべてのものに執着する。富に執着し、財に執着し、名に執着し、命に執着する。

有無、善悪、正邪、すべてのものにとらわれて迷いを重ね苦しみと悩みとを招く。

ここに、ひとりの人がいて、長い旅を続け、とあるところで大きな河を見て、こう思った。この河のこちらの岸は危いが、向こう岸は安らかに見える。そこで筏を作り、その筏によって、向こうの岸に安らかに着くことができた。そこで「この筏は、わたしを安らかにこちらの岸へ渡してくれた。大変役に立った筏である。だから、この筏を捨てることなく、肩に担いで、行く先へ持って行こう。」と思ったのである。

このとき、この人は筏に対して、しなければならぬことをしたといわれるであろうか。そうではない。

この比喩は、「正しいことさえ執着すべきではなく、捨て離れなければならない。まして、正しくないことは、なおさら捨てなければならぬ。」ということを示している。

三、すべてのものは、来ることもなく、去ることもなく、生ずることもなく、滅することもなく、したがって得ることもなければ、失うこともない。

仏は、^{ほとけ}「すべてのものは有無の範疇^{はんちゆう}を離れているから、有にあらざ、無にあらざ、生ずることもなく、滅することもない。」と説く。すなわち、すべてのものは、^{いんねん}因縁から成つていて、ものそれ自体の本性は実在性がないから、有にあらざといひ、また因縁から成つているので無でもないから、無にあらざといふのである。

ものの姿を見て、これに執着^{しゆうじやく}するのは、迷いの心を招く原因となる。もしも、ものの姿を見ても執着しないならば、はからいは起こらない。さとりは、このまことの道理を見て、はからいの心を離れることである。

まことに世は夢のようであり、財宝もまた幻のようなものである。絵に見える遠近と同じく、見えるけれども、あるのではない。すべては陽炎^{かげろう}のようなものである。

四、無量の因縁によって現われたものが、永久にそのまま存在すると信ずるのは、^{じようけん}常見という誤った見方である。また、まったくなくなると信ずるのは、^{だんけん}断見という誤つ

た見方である。

この断・常・有・無は、ものそのものの姿ではなく、人の執着から見た姿である。すべてのものは、もともとこの執着の姿を離れている。

ものはすべて縁によつて起こつたものであるから、みなうつり変わる。実体を持っているもののように永遠不変ではない。うつり変わるので、幻のようであり、陽炎かげろうのようではあるが、しかも、また、同時に、そのまま真実である。うつり変わるままに永遠不変なのである。

川は人にとっては川と見えるけれども、水を火と見る餓鬼がきにとっては、川とは見えない。だから、川は餓鬼にとっては「ある」とはいえず、人にとっては「ない」とはいえない。これと同じように、すべてのものは、みな「ある」ともいえず、「ない」ともいえない、幻のようなものである。

しかも、この幻のような世界を離れて、真実の世も永遠不変の世もないのであるから、この世を、仮のものと見るのも誤り、実の世と見るのも誤りである。

ところが、世の人びとは、この誤りのもとは、この世の上にあると見ているが、この世がすでに幻とすれば、幻にはからう心があつて、人に誤りを生じさせるはずはない。誤りは、この道理を知らず、仮の世と考え、実の世と考える愚かな人の心に起こる。

*智慧ある人は、この道理をさとつて、幻を幻と見るから、ついにこの誤りを犯すことはない。

第四節 かたよらない道

一、道を修めるものとして、避けなければならぬ二つの偏かたよつた生活がある。その一は、欲に負けて、欲にふける卑いやしい生活であり、その二は、いたずらに自分の心身を責めさいなむ苦行の生活である。

この二つの偏つた生活を離れて、心眼を開き、*智慧を進め、さとりに導ちゆうじゆうく*中道の生活がある。

この中道の生活とは何であるか。正しい見方、正しい思い、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶、正しい心の統一、この八つの正しい道である。

すべてのものは縁によって生滅しやうめつするものであるから、有と無とを離れている。愚かな者は、あるいは有と見、あるいは無と見るが、正しい智慧ちえの見るところは、有と無とを離れている。これが中道ちゆうどうの正しい見方である。

二、一本の材木が、大きな河を流れているとする。その材木が、右左の岸に近づかず、中流にも沈まず、陸おかにも上らずのぼ、人にも取られず、渦うずにも巻き込まれず、内から腐ることなければ、その材木はついに海に流れ入るであろう。

この材木のたとえのように、内にも外にもとらわれず、有にも無にもとらわれず、正にも邪にもとらわれず、迷いを離れ、さとりにこだわらず、中流に身をまかせるのが、道を修めるものの中道の見方、中道の生活である。

道を修める生活にとって大事なことは、両極端にとらわれず、常に中道を歩むことである。すべてのものは、生ずることなく、滅することもなく、きまつた性質のないものと知つてとらわれず、自分の行っている善にもとらわれず、すべてのものに縛られてはならない。

とらわれないとは握りしめないこと、執着しゅうじやくしないことである。道を修める者は、死を恐れず、また、生をも願わない。この見方、あの見方と、どのような見方のあとをも追わないのである。

人が執着の心を起こすとき、たちまち、迷いの生活が始まる。だから、さとりにへの道を歩むものは、握りしめず、取らず、とどまらないのが、とらわれない生活である。

三、さとりにはきまった形やものがないから、さとることはあるがさとられるものはない。迷いがあるからさとりというのであって、迷いがなくなればさとりもなくなる。迷いを離れてさとりはなく、さとりを離れて迷いはない。

だから、さとりのあるのはなお障さまたげとなる。闇やみがあるから照らすということがあり、闇がなくなれば照らすということもなくなる。照らすことと照らされるものと、ともになくなってしまうのである。

まことに、道を修めるものは、さとってさとりにとどまらない。さとりのあるのはなお迷いだからである。

この境地に至れば、すべては、迷いのままにさとりであり、闇ぐみのままに光である。すべての*煩惱ぼんのうがそのままさとりであるところまで、さとりきらなければならぬ。

四、ものが平等であつて差別のないことを*空くうという。ものそれ自体の本質は、実体がなく、生ずることも、滅することもなく、それはことばでいい表わすことができないから、空というのである。

すべてのものは互いに關係して成り立ち、互いによりあつて存在するものであり、ひとり成り立つものではない。

ちようど、光と影、長さと短さ、白と黒のようなもので、ものそれ自体の本質が、ただひとりであり得るものではないから無自性むじじょうという。

また、迷いのほかにさとりがなく、さとりのほかに迷いがない。これら二つは、互いに相違するものではないから、ものには二つの相反した姿があるのではない。

五、人はいつも、ものの生ずることと、滅することを見るのであるが、ものにはもともと生ずることがないのであるから、滅することもない。

このものの真実の姿を見る眼を得て、ものに生滅しやうめつの二つのないことを知り、別のものではないという真理をさとするのである。

人は我ががあると思うから、わがものに執着しやくちやくする。しかし、もともと、我がないのであるから、わがもののあるはずがない。我とわがものないことを知って、別のものではないという真理をさとするのである。

人は清らかさと汚れとがあると思って、この二つにこだわらる。しかし、ものにはもともと、清らかさもなければ汚れもなく、清らかさも汚れも、ともに人が心のはからいの上で作ったものにすぎない。

人は善と悪とを、もともと別なものと思い、善悪にこだわっている。しかし、単なる善もなく、単なる悪もない。さとの道に入った人はこの善悪はもともと別ではないと知って、その真理をさとするのである。

人は不幸を恐れて幸福を望む。しかし、眞実の智慧ちえをもつてこの二つをながめると、不幸の状態がそのままに、幸福となることがわかる。それだから、不幸がそのままに幸福であるときとつて、心身にまわりついて自由を束縛する迷いも眞実の自由も特別にはないと知つて、こうして、人はその眞理をさとるのである。

だから、有と無といい、迷いとさとりといい、実と不実といい、正と邪といつても、実は相反した二つのものがあるのではなく、まことの姿においては、言うことも示すことも、識しすることもできない。このことばやはからいを離れることが必要である。人がこのようなことばやはからいを離れたとき、眞実の空くうをさとることができる。

六、例えば、蓮華れんげが清らかな高原や陸地に生えず、かえつて汚い泥どろの中に咲くように、迷いを離れてさとりがあるのではなく、誤つた見方や迷いからほとけの種が生まれる。

あらゆる危険をおかして海の底に降りなければ、価あたも知れないほどにすばらしい宝は得られないように、迷いの泥海じつうみの中に入らなければ、さとりの宝を得ることはできない。山のように大きな、我がへの執着しゅうじやくを持つ者であつて、はじめて道を求める心も起こし、さ

とりもついに生ずるであらう。

だから、昔、仙人せんじんが刃やいばの山に登っても傷つかず、自分の身を大火の中に投げ入れても焼け死なず、すがすがしさを覚えたというように、道を求める心があれば、名譽利欲の刃の山や、憎しみの大火の中にも、さとの涼しい風が吹き渡ることであらう。

七、仏ほとけの教えは、相反する二つを離れて、それらが別のものではないという真理をさとするのである。もしも、相反する二つの中の一つを取って執着しゅうじやくすれば、たとえ、それが善であっても、正であっても、誤ったものになる。

もしも、人がすべてのものはうつり変わるといふ考えにとらわれるならば、これも間違つた考えにおちいるものであり、また、もしも、すべてのものは変わらないといふ考えにとらわれるならば、これももとより間違つた考えなのである。もしまた人が我ががあると執着すれば、それは誤つた考えで、常に苦しみを離れることができない。もしも我がないと執着するならば、それも間違つた考えで、道を修めても効果がない。

また、すべてのものはただ苦しみであるにとらわれれば、これも間違つた考えであり、また、すべてのものはただ楽しみだけであるといえば、これも間違つた考えである。仏ほとけの教えは中道ちゆうどうであつて、これらの二つの偏りかたよから離れている。

第三章 さとりの種

第一節 清らかな心

一、人にはいろいろの種類がある。心の曇りの少ないものもあれば、曇りの多いものもあり、賢いものもあれば、愚かなものもある。

善い性質のものもあれば、悪い性質のものもあり、教えやすいものもあれば、教えにくいものもある。

例えていうと、青・赤・黄・白、色さまざまな蓮はすの池があつて、水中に生え、水中に育つて、水の表面にでない蓮もあれば、水面にとどまる蓮もあり、水面を離れて、水にもぬれない蓮もあるようなものである。

このちがいの上に、さらにまた、男・女のちがいがあつて、しかし、人の本性として

ちがいがあつたのではない。男が道を修めてさとりを得るように、女もまた道を修めれば、しかるべき心の道すじを經へて、さとりに至るであらう。

象を扱とう術を学ぶのには、信念と健康をもち、勤勉であつて、偽りがなく、その上に*智慧がなければならぬ。*仏に従つてさとりを得るにも、やはりこの五つがなければならぬ。この五つがあれば、男でも女でも、仏の教えを学ぶのに長い年月を要しない。これは、人にはみな、さとるべき性質がそなわつてゐるからである。

二、さとりの道において、人はおのれの眼をもつて仏を見、心をもつて仏を信ずる。それと同じく、人をして生死の巷ちまたに今日まで流転るてんさせたのも、また、この眼と心である。国王が、侵入した賊を討とうとするとき、何よりも先に、その賊のありかを知ることが必要であるように、いま迷いをなくそうとするのにも、まずその眼と心のありかを確かめなければならぬ。

人が室内にいて目を開けば、まず、部屋の中のものを見、やがて窓を通して、外の景

色を見る。部屋の内のものを見ないで、外のものばかりを見る目はない。

ところが、もしもこの身の内に心があるならば、何よりも先に、身の内のことを詳しく知らなければならぬはずであるのに、人びとは、身の外のことだけをよく知っていて、身の内のことについては、ほとんど何ごとも知ることができない。

また、もしも心が身の外にあるとするならば、身と心とが互いに離れて、心の知るところを身は知らず、身の知るところを心は知らないはずである。ところが、事實は、心の知るところを身が感じ、身に感ずるところを心はよく知っているから、心は身の外にあるということもできない。いったい、心の本体はどこにあるのであろうか。

三、もともと、すべての人びとが、始めも知れない昔から、* 煩惱ぼんのうの行為に縛られて、迷いを重ねているのは、二つのもとを知らないからである。

一つには生死のもとである迷いの心を、自己の本性と誤っていること。二つには、さとの本性である清浄しやうじやうな心が、迷いの心の裏側に隠されたまま自己の上にそなわって

ることを知らないことである。

拳こぶしをかためて臂ひじをあげると、目はこれを見て心はこのことを知る。しかし、その知る心は、真実の心ではない。

はからいの心は欲から起こり、自分の都合をはからう心であり、縁に触れて起こる心であつて、真実の本体のない、うつり変わる心である。この心を、実体のある心と思うところに、迷いが起こる。

次に、その拳を開くと、心は拳の開いたことを知る。動くものは手であろうか、心であろうか、それとも、そのいずれでもないのか。

手が動けば心も動き、また、心の動きにつれて手も動く。しかし、動く心は、心の表面であつて根本の心ではない。

四、すべての人びとには、清浄しょうじやうの本心がある。それが外のいんねん因縁によつて起こる迷いのちりのために覆おほわれている。しかし、あくまでも迷いの心は従であつて主ではない。

月は、しばらく雲に覆おほわれても、雲に汚されることもなく、また動かされることもない。

だから、人は浮動するちりのような迷いの心を自分の本性と思つてはならない。

また、人は、動かず、汚されないさとの本心に目覚めて、真実の自己に帰らなければならぬ。浮動する迷いの心にとられ、さかさまの見方に追われているので、人は迷いの巷ちまたをさまようのである。

人の心の迷いや汚れは、欲とその変化する外界の縁に触れて起こるものである。

この縁の来ること去ることに關係なく、永久に動かず滅びない心、これが人の本体であつて、また主あるじでもある。

客が去つたからといって、宿屋がなくなつたとはいえないように、縁によつて生じたり滅したりするはからの心がなくなつたからといって、自分がなくなつたとはいえない。外の縁によつてうつり変わるはからは、心の本体ではない。

五、ここに講堂があつて、太陽が出て明るくなり、太陽が隠れて暗くするとする。

明るさは太陽に返し、暗さは夜に返すこともできよう。しかし、その明るさや暗さを知る力は、どこにも返すことはできない。それは心の本性、本体に返すよりほかに道はない。太陽が現われて、明るいと見るのもひとときの心であり、太陽が隠れて、暗いと見るのもひとときの心である。

このように、明暗という外の縁に引かれて、明暗を知る心が起こるが、明暗を知る心は、ひとときの心であつて、心の本体ではなく、その明暗を知る力の根本は、心の本体である。外の因縁いんねんに引かれて生じたり滅したりする善悪・愛憎おもひの念は、人の心に積まれた汚れによつて起こるひとときの心なのである。

煩惱ぼんのうのちに包まれて、しかも染まることも、汚れることもない、本来しようじよ清浄な心がある。まるい器うつわに水を入れるとまるくなり、四角な器に水を入れると四角になる。しかし、本来、水にまるや四角の形があるのではない。ところが、すべての人びとはこのことを

忘れて、水の形にとらわれている。

善しよ悪しあと見、好む好まぬと考え、有り無しと思ひ、その考えに使われ、その見方に縛られて、外のものを追つて苦しんでいる。

縛られた見方を外の縁に返し、縛られることのない自己の本性にたち帰ると、身も心も、何ものにもさえぎられることのない、自由な境地が得られるであろう。

第二節　かくれた宝

一、清浄しやうじやうの本心とは、言葉を変えていえばふつしやう仏性である。仏性とは、すなわちほとけ仏の種である。レンズを取つて太陽に向かい、もぐさを当てて火を求めるときに、火はどこから来るのであろうか。太陽とレンズとはあいへだたること遠く、合することはできないけれども、太陽の火がレンズを縁とし、もぐさの上に現われたことは疑いを入れない。また、もしも太陽があつても、もぐさに燃える性質がなければ、もぐさに火は起こらない。

いま、仏ほとけを生む根本である仏性ぶつしょうのもぐさに、仏の*智慧ちえのレンズを当てれば、仏の火は、仏性の開ける信の火として、人びとというもぐさの上に燃えあがる。

仏はその智慧のレンズを取って世界に当てられるから、世をあげて信の火が燃えあがるのである。

二、人びとは、この本来そなわっているさとりの仏性にそむいて、*煩惱ぼんのうのちりにとらわれ、ものの善よし悪あしの姿に心を縛られて、不自由を嘆いている。

なぜ、人びとは、本来さとりの心をそなえていながら、このように偽りを生み、仏性の光を隠し、迷いの世界にさまよっているのだろうか。

昔ある男が、ある朝鏡に向かつて、自分の顔も頭もないのにあわて驚いた。しかし、顔も頭もなくなくなったのではなく、それは鏡を裏返しに見えて、なくなったと思っていたのであった。

さとりに達しようとして達せられないからといって苦しむのは愚かであり、また、必要のないことである。さとりの中に迷いはないのであるが、限らない長い時間に、外の

ちりに動かされて、妄想を描き、その妄想によつて迷いの世界を作り出していたのである。

だから、妄想がやめば、さとりはおのずと返つてきて、さとりのほかに妄想があるのではないとわかるようになる。しかも、不思議なことに、ひとたびさとした者には妄想はなく、さとられるものもなかったことに気づくのである。

三、この仏性は尽きることがない。たとえ畜生に生まれ、餓鬼となつて苦しみ、地獄に落ちても、この仏性は絶えることはない。

汚い体の中にも、汚れた煩惱の底にも、仏性はその光を包み覆われている。

四、昔、ある人が友の家に行き、酒に酔つて眠っているうちに、急用で友は旅立った。友はその人の将来を気づかない、価値の高い宝石をその人の着物のえりに縫いこんでおいた。

そうとは知らず、その人は酔いからさめて他国へとさすらい、衣食に苦しんだ。その後、ふたたびその旧友にめぐり会い、「おまえの着物のえりに縫いこまれている宝石を

用いよ。」と教えられた。

このたとえのように、ぶつしよう仏性の宝石は、むさほ貪りやいか瞋りというほんのう煩惱の着物のえりに包まれて、汚されずにいるのである。

このように、どんな人でもほとけ仏のちえ智慧のそなわらないものはないから、おのれ仏は人びとを見通して、「すばらしいことだ、人びとはみなおのれ仏の智慧とくどく功德とをそなえている。」とほめたたえる。

しかも、人びとは愚かさおおに覆われて、ものごとをさかさまに見、おのれのおのれ仏性を見ることができなから、おのれ仏は人びとに教えて、そのもうごう妄想を離れさせ、本来、おのれ仏と違わないものであることを知らせる。

五、ここでいうおのれ仏とはすでに成ってしまったおのれ仏であり、人びとは将来まさに成るべきおのれ仏であって、それ以外の相違はない。

しかし、成るべきおのれ仏ではあるけれども、おのれ仏と成ったのではないから、すでに道を成しとげたかのように考えるなら、それは大きな過ちを犯しているのである。

仏性はあつても、修めなければ現われず、現われなければ道を成しとげたのではない。

六、昔、ひとりの王があつて、象を見たことのない人を集め、目かくしして象に触れさせて、象とはどんなものであるかを、めいめいに言わせた。象の牙きはに触れた者は、象は大きな人參にんじんのようなものであるといい、耳に触れた者は、扇のようなものであるといい、鼻に触れた者は、杵きねのようなものであるといい、足に触れた者は、臼うすのようなものであるといい、尾に触れた者は、繩のようなものであると答えた。ひとりとして象そのものをとらえ得た者はなかった。

人を見るのもこれと同じで、人の一部分に触れることができても、その本性である仏性を言い当てることは容易ではない。

死によつても失われず、煩惱ぼんのうの中にあつても汚れず、しかも永遠に滅びることのない仏性を見つけることは、仏ほとけと法ほとけによるもののはかは、でき得ないのである。

第三節 とらわれを離れて

一、このように、人には仏性ぶつしょうがあるという、それは他の教えでいう我がと同じであると思うかも知れないが、それは誤りである。

私の考えは執着しゅうじやくしん心によつて考えられるけれども、さとした人にとっては、我は否定されなければならぬ執着であり、仏性は開き現わさなければならぬ宝である。仏性は我に似ているけれども、「われあり」とか「わがもの」とかいう場合の我ではない。

我があると考えるのは、ないものをあると考える、さかさまの見方であり、仏性を認めないことも、あるものをないと考える、さかさまの見方である。

例えば、幼子わかごが病にかかつて医師にかかるとすると、医師は薬を与えて、この薬のこなれるまでは乳を与えてはならないと言いつける。

母は乳房ちぶさにいがいものを塗り、子に乳をいやがらせる。後に、葉のこなれたときに、乳房を洗って、子の口にくくませる。母のこのふるまいは、わが子をいとおしむやさしい心からくるものである。

ちょうどこのように、世の中の誤った考えを取り去り、我がの執着しゅうじやくを取り去るために、我はな
いと説いたが、その誤った見方を取り去ったので、あらためて仏性ぶつじようがあると説いたのである。

我は迷いに導くものであり、仏性はさとりに至らせるものである。

家に黄金こがねの箱を持ちながら、それを知らないために、貧しい生活をする人をあわれんで、その黄金の箱を掘り出して与えるように、*仏ほとけは人びとの仏性を開いて、彼らに見せる。

二、それなら、人びとは、みなこの仏性をそなえているのに、どうして貴賤きせん・貧富ひんぶという差別があり、殺したり、欺あざむかれたりするようないとわしいことが起こるのであるか。

例えば、宮廷きゅうていに仕える一力士いっりきすが、眉間まゆかんに小さな金剛こんごうの珠玉しゆぎよくを飾ったまま相撲をとって、

その額ひたいを打ち、玉が膚はだの中に隠れてできものを生じた。力士は、玉をなくしたと思い、ただそのできものを治すために医師に頼む。医師は一目見て、そのできものが膚の中に隠れた玉のせいであると知り、それを取り出して力士に見せた。

人びとの仏性ぶつしょうも煩惱ぼんのうの塵ちりの中に隠れ、見失われているが、善き師によってふたたび見いだされるものである。

このように、仏性はあっても貪むさぼりと瞋いかりと愚かさのために覆おおわれ、業ごうと報むくいと縛られて、それぞれ迷いの境遇を受けるのである。しかし、仏性は実際には失われても破壊されてもおらず、迷いを取り除けばふたたび見いだされるものである。

たとえの中の力士が、医師によって取り出されたその玉を見たように、人びとも、仏ほとけの光によって仏性を見ることであろう。

三、赤・白・黒と、さまざまに毛色の違った牝牛めうしでも、乳をしぼると、みな同じ白色の乳を得るように、いかに境遇が異なり、生活が異なっても、人びとはみな同じ

仏性をそなえている。

例えば、ヒマラヤ山に貴い薬があるが、それは深い草むらの下にあつて、人びとはこれを見つけない。昔、ひとりの賢人がいて、その香りを尋ねてありかを知り、槌とを作つて、その中に薬を集めた。しかし、その人の死後、薬は山にうもれ、槌の中の薬は腐り、流れるところによつて、その味を異にした。

仏性も、このたとえのように、深く煩惱ぼんのうの草むらに覆おおわれているから、人びとはこれを容易に見つけることができない。いまや仏ほとけはその草むらを開いて、彼らに示した。仏性の味は一つの甘さであるが、煩惱のためにさまざまの味を出し、人びとはさまざまに生き方をする。

四、この仏性は金剛石こんごうせきのように堅いから、破壊することはできない。砂や小石に穴をあけることはできても、金剛石に穴をあけることはできない。

身と心は破られることがあつても、仏性を破ることはできない。

仏性は、実にもつともすぐれた人間の特質である。世に、男はまさり女は劣るとする
ならわしもあるが、仏の教えにおいては、男女の差別を立てず、ただこの仏性を知るこ
とを尊いとす。

黄金の粗金を溶かして、そのかすを取り去り、鍊りあげると貴い黄金になる。心の粗
金を溶かして煩惱のかすを取り去ると、どんな人でも、みなすべて同一の仏性を開き現
わすことができる。

第四章 煩ほん 惱のう

第一節 心のけがれ

一、ふつしょう *仏性を覆おおいつつむ *煩惱に二種類ある。

一つは知性の煩惱である。二つには感情の煩惱である。

この二つの煩惱は、あらゆる煩惱の根本的な分類であるが、このあらゆる煩惱の根本となるものを求めれば、一つには *無明むみょう、二つには愛欲となる。

この無明と愛欲とは、あらゆる煩惱を生み出す自在の力を持っている。そしてこの二つこそ、すべての煩惱の源なのである。

無明とは無知のことで、ものの道理をわきまえないことである。愛欲は激しい欲望で、

生しゅじやくに對する執着しゅじやくが根本であり、見るもの聞くものすべてを欲しがる欲望ともなり、また転じて、死を願うような欲望ともなる。

この無明むみやうと愛欲あいよくとをもとにして、これから貪りむさぼ、瞋りいか、愚かさ、邪見じゃけん、恨みうら、嫉みねた、へつらい、たぶらかし、おごり、あなどり、ふまじめ、その他いろいろの煩惱ぼんのうが生まれてくる。

二、貪りの起きるのは、氣に入つたものを見て、正しくない考えを持つためである。瞋りの起きるのは、氣に入らないものを見て、正しくない考えを持つためである。愚しさはその無知のために、なさなければならぬことと、なしてはならぬことを知らないことである。邪見は正しくない教えを受けて、正しくない考えを持つことから起きる。

この貪りと瞋りと愚かさは、世の三つの火といわれる。貪りの火は欲にふけて、真心を失つた人を焼き、瞋りの火は、腹を立てて、生けるものの命を害そこなう人を焼き、愚かさの火は、心迷つてほとけ仏の教えを知らない人を焼く。

まことに、この世は、さまざまの火に焼かれている。貪りの火、瞋りの火、愚かさの

火、生・老・病・死の火、憂い・悲しみ・苦しみ・悶えの火、さまざまの火によって炎と燃えあがっている。これらの煩惱の火はおのれを焼くばかりでなく、他をも苦しめ、人を身・口・意の三つの悪い行為に導くことになる。しかも、これらの火によってできた傷口のうみは触れたものを毒し、悪道に陥れる。

三、貪りは満足を得たい気持ちから、瞋りは満足を得られない気持ちから、愚かさは不浄な考えから生まれる。貪りは罪の汚れは少ないけれども、これを離れることは容易でなく、瞋りは罪の汚れが大きいけれども、これを離れることは早いものである。愚かさは罪の汚れも大きく、またこれを離れることも容易ではない。

したがって、人びとは気に入ったものの姿を見聞きしては正しく思い、気に入らないものの姿を見ては慈しみの心を養い、常に正しく考えて、この三つの火を消さなければならぬ。もしも、人びとが正しく、清く、無私の心に満ちているならば、煩惱によって惑わされることはない。

四、貪^{むさぼ}り、瞋^{いか}り、愚^{むさ}かさは熱のようなものである。どんな人でも、この熱の一つでも持てば、いかに美しい広びろとした部屋に身を横たえても、その熱にうなされて、寝苦しい思いをしなければならぬ。

この三つの煩惱^{ぼんのう}のない人は、寒い冬の夜、木の葉を敷物とした薄い寢床でも、快く眠ることができ、むし暑い夏の夜、閉じこめられた狭苦しい部屋でも、安らかに眠ることができる。

この三つは、この世の悲しみと苦しみのもとである。この悲しみと苦しみのもとを絶つものは、戒めと心の統一と^{ちえ}智慧である。戒めは貪りの汚れを取り去り、正しい心の統一は瞋りの汚れを取り去り、智慧は愚かさの汚れを取り去る。

五、人間の欲にははてしがない。それはちようど塩水を飲むものが、いっこうに渴^{かわ}きがとまらないのに似ている。彼はいつまでたっても満足することがなく、渴きはますます強くなるばかりである。

人はその欲を満足させようとするけれども、不満がつらいついていらだつだけである。

人は欲を決して満足させることができない。そこには求めて得られない苦しみがあり、満足できないときには、氣も狂うばかりとなる。

人は欲のために争い、欲のために戦う。王と王、臣と臣、親と子、兄と弟、姉と妹、友人同士、互いにこの欲のために狂わされて相争い、互いに殺しあう。

また人は、欲のために身をもちくずし、盗み、詐欺し、姦淫する。ときには捕らえられて、さまざまな刑を受け、苦しみ悩む。

また、欲のために、身・口・意の罪を重ね、この世で苦しみを受けるとともに、死んで後の世には、暗黒の世界に入って、さまざまな苦しみを受ける。

六、愛欲は煩惱の王、さまざまの煩惱がこれにつき従う。

愛欲は煩惱の芽をふく湿地、さまざまな煩惱を生ずる。愛欲は善を食う悪鬼、あらゆる善を滅ぼす。

愛欲は花に隠れ住む毒蛇どくじや、欲の花を貪むさぼるものに毒を刺して殺す。愛欲は木を枯らすつる草、人の心に巻きつき、人の心の中の善のしるを吸い尽くす。愛欲は悪魔の投げた餌え、人はこれにつられて悪魔の道に沈む。

飢えた犬に血を塗ぬった乾いた骨を与えると、犬はその骨にしゃぶりつき、ただ疲れと悩みとを得るだけである。愛欲が人の心を養わないのは、まったくこれと同じである。

一切れの肉を争って獣は互いに傷つく。たいまつを持って風に向かう愚かな人は、ついにこのれ自身を焼く。この獣のように、また、この愚かな人のように、人は欲のためにおのれの身を傷つけ、その身を焼く。

七、外から飛んでくる毒矢は防ぐすがあつても、内からくる毒矢は防ぐすべがない。貪りと瞋いかりと愚かさとは、四つの毒矢にもたとえられるさまざまな病を起こすものである。

心に貪りと瞋りと愚かさがあるときは、口には偽りとむだ口悪口と二枚舌を使い、身には殺生せつしょうと盗みとよこしまな愛欲を犯すようになる。

意の三つ、口の四つ、身の三つ、これらを十悪という。

知りながらも偽りを言うようになれば、どんな悪事をも犯すようになる。悪いことをするから、偽りを言わなければならないようになり、偽りを言うようになるから、平気で悪いことをするようになる。

人の貪りも、愛欲も恐れも瞋りも、愚かさからくるし、人の不幸も難儀も、また愚かさからくる。愚かさは実に人の世の病毒にほかならない。

八、人は煩惱によって業を起こし、業によって苦しみを招く。煩惱と業と苦しみの三つの車輪はめぐりめぐってはてしがない。

この車輪の回転には始めもなければ終わりもない。しかも人はこの輪廻から逃れるすべを知らない。永遠に回帰する輪廻に従って、人はこの現在の生から、次の生へと永遠に生まれ変わってゆく。

限りない輪廻の間に、ひとりの人が焼き捨てた骨を積み重ねるならば、山よりも高く

なり、また、その間に飲んだ母の乳を集めるならば、海の水よりも多くなるであろう。だから、人には仏性ぶつしょうがあるとはいえ、煩惱ぼんのうの泥どろがあまりにも深いため、その芽生えは容易でない。芽生えない仏性はあってもあるとはいわれないので人びとの迷いははてしない。

第二節 人の性質

一、人の性質は、ちようど入口のわからない藪やぶのように、わかりにくい。これに比べると、獣の性質はかえつてわかりやすい。このわかりにくい性質の人を区分して、次の四種類とする。

一つには、自ら苦しむ人で、間違つた教えを受けて苦行する。

二つには、他人を苦しめる人で、殺したり盗んだり、そのほかさまざましわざなむごい仕事をしわざをする。

三つには、自ら苦しむとともに他人をも苦しめる人である。

四つには、自らも苦しまず、また他人をも苦しめない人で、欲を離れて安らかに生き、^{ほろけ}仏の教えを守つて、殺すことなく盗むことなく、清らかな行いをする人である。

二、またこの世には三種の人がある。岩に刻んだ文字のような人と、砂に書いた文字のような人と、水に書いた文字のような人である。

岩に刻んだ文字のような人とは、しばしば腹を立てて、その怒りを長く続け、怒りが、刻み込んだ文字のように消えることのない人をいう。

砂に書いた文字のような人とは、しばしば腹を立てるが、その怒りが、砂に書いた文字のように、速やかに消え去る人を指す。

水に書いた文字のような人とは、水の上に文字を書いても、流れて形にならないように、他人の悪口や不快なことをば聞いても、少しも心に跡を留^とめることもなく、温和な気の満ちている人のことをいう。

また、ほかにも三種類の人がある。第一の人は、その性質がわかりやすく、心高ぶり、

かるはずみであつて、常に落ち着きのない人である。第二の人は、その性質がわかりにくく、静かにへりくだつて、ものごとに注意深く、欲を忍ぶ人である。第三の人は、その性質がまったくわかりにくく、自分の^{ほんのう}煩惱を滅ぼし尽くした人のことである。

このように、さまざまに人を区別することができるが、その実、人の性質は容易に知ることはできない。ただ、^{ほとけ}仏だけがこれらの性質を知りぬいて、さまざまに教えを示す。

第三節 現実の人生

一、ここに人生にたとえた物語がある。ある人が、河の流れに舟を浮かべて下るとする。岸に立つ人が声をからして叫んだ。「楽しそうに流れを下ることをやめよ。下流には波が立ち、^{うずま}渦巻きがあり、^{わに}鰐と恐ろしい夜叉との住む淵がある。そのままに下れば死ななければならぬ。」と。

このたとえで「河の流れ」とは、愛欲の生活をいい、「楽しそうに下る」とは、自分の身に執着^{しゅうじやく}することであり、「波立つ」とは、怒りと悩みの生活を表わし、「渦巻き」と

は、欲の楽しみを示し、「鰐わにと恐ろしい夜叉やしやの住む淵ふち」とは、罪によって滅びる生活を指し、「岸に立つ人」とは、*仏ほとけをいうのである。

ここにもう一つのたとえがある。ひとりの男が罪を犯して逃げた。追手が追ってきたので、彼は絶体絶命になって、ふと足もとを見ると、古井戸があり、藤蔓ふじつるが下がっている。彼はその藤蔓をつたって、井戸の中へ降りようとすると、下で毒蛇レクシヤが口を開けて待っているのが見える。しかたなくその藤蔓を命の綱にして、宙ちゆうにぶら下がっている。やがて、手が抜けそうに痛んでくる。そのうえ白黒二匹ねずみの鼠ねずみが現われて、その藤蔓をかじり始める。

藤蔓がかみ切られたとき、下へ落ちて餌食えじきにならなければならない。そのとき、ふと頭をあげて上を見ると、蜂はちの巣はちみつから蜂蜜はちみつの甘いしずくが一滴二滴と口の中へしたたり落ちてくる。すると、男は自分の危い立場を忘れて、うっとりとなるのである。

この比喩たとえで、「ひとり」とは、ひとり生まれひとり死ぬ孤独の姿であり、「追手」や「毒蛇」は、この欲のもとになるおのれの身体のことであり、「古井戸の藤蔓」とは、人の命のことであり、「白黒二匹の鼠」とは、歳月を示し、「蜂蜜のしずく」とは、眼前の欲

の楽しさのことである。

二、また、さらにもう一つのたとえを説こう。王が一つの箱に四匹の毒蛇どくじやを入れ、ひとりの男にその蛇を養へびうことを命じて、もし一匹の蛇でも怒らせれば、命を奪うと約束させる。男は王の命令を恐れて、蛇の箱を捨てて逃げ出す。

これを知った王は、五人の臣下に命じて、その後を追わせる。彼らは偽って彼に近づき、連れ帰ろうとする。男はこれを信じないで、ふたたび逃げて、とある村に入り、隠かくれ家がを探す。

そのとき、空に声あつて、この村は住む人もなく、そのうえ今夜、六人の賊が来て襲うであろうと告げる。彼は驚いて、ふたたびそこを逃げ出す。行く手に荒波を立てて激しく流れている河がある。渡るには容易でないが、こちら岸の危険を思いつて筏いかだを作り、かろうじて河を渡ることを得、はじめて安らぎを得た。

「四匹の毒蛇の箱」とは地水火風の四大要素から成るこの身のことである。この身は、欲のもとであつて、心の敵である。だから、彼はこの身を厭いとって逃げ出した。

「五人の男が偽って近づいた」とは、同じくこの身と心とを組み立てている五つの要素のことである。

「隠れ家^{かくが}」とは、人間の六つの感覚器官のことであり、「六人の賊」とは、この感覚器官に対する六つの対象のことである。このように、すべての官能の危いのを見て、さらに逃げ出し、「流れの強い河を見た」とは、*煩惱^{ぼんのう}の荒れ狂う生活のことである。

この深さの測り^{はか}知れない煩惱の河に、教えの筏^{いかだ}を浮かべて、安らかな彼の岸^かに達したのである。

三、世に母も子を救い得ず、子も母を救い得ない三つの場合がある。すなわち、大火災と大水害と、大盗難のときである。しかし、この三つの場合においても、ときとしては、母と子が互いに助け合う機会がある。

ところがここに、母は子を絶対に救い得ず、子も母を絶対に救い得ない三つの場合がある。それは、老いの恐れと、病の恐れと、死の恐れとの襲い来ったときのことである。

母の老いゆくのを、子はどのようにしてこれに代わることができようか。子の病む姿のいじらしさに泣いても、母はどうして代わって病むことができよう。子供の死、母の死、いかに母子であつても、どうしても代わりあうことはできない。いかに深く愛しあつている母子でも、こういう場合には絶対に助けあうことはできないのである。

四、人間世界において悪事をなし、死んで地獄に墮ちた罪人に、閻魔王が尋ねた。

「おまえは人間の世界にいたとき、三人の天使に会わなかつたか。」「大王よ、わたくしはそのような方には会いません。」

「それでは、おまえは年老いて腰を曲げ、杖にすがつて、よぼよぼしている人を見なかつたか。」「大王よ、そういう老人ならば、いくらでも見ました。」「おまえはその天使に会いながら、自分も老いゆくものであり、急いで善をなさなければならぬと思わず、今日の報いを受けるようになった。」

「おまえは病にかかり、ひとりで寝起きもできず、見るも哀れに、やつれはてた人を見なかつたか。」「大王よ、そういう病人ならいくらでも見ました。」「おまえは病人とい

うその天使に会いながら、自分も病まなければならぬ者であることを思わず、あまりにもおろそかであったから、この地獄へくることになったのだ。」

「次に、おまえは、おまえの周囲で死んだ人を見なかったか。」「大王よ、死人ならば、わたくしはいくらでも見てまいりました。」「おまえは死を警め告げる天使に会いながら、死を思わず善をなすことを怠つて、この報いを受けることになった。おまえ自身のこととは、おまえ自身がその報いを受けなければならない。」

五、裕福な家の若い嫁であつたキサールゴータミーは、そのひとり子の男の子が、幼くして死んだので、気が狂い、冷たい骸を抱いて巷に出、子供の病を治す者はいないかと尋ね回つた。この狂つた女をどうすることもできず、町の人びとはただ哀れげに見送るだけであつたが、釈尊の信者がこれを見かねて、その女に祇園精舎の釈尊のもとに行くようにすすめた。彼女は早速、釈尊のもとへ子供を抱いて行つた。

釈尊は静かにその様子を見て、「女よ、この子の病を治すには、芥子の実がある。町

に出て四・五粒もらってくるがよい。しかし、その芥子けしの実は、まだ一度も死者の出ない家からもらつてこなければならぬ。」と言われた。

狂った母は、町に出て芥子の実を求めた。芥子の実は得やすかつたけれども、死人の出ない家は、どこにも求めることができなかつた。ついに求める芥子の実を得ることができず、仏ほとけのもとにもどつた。かの女は釈尊しゃくそんの静かな姿に接し、初めて釈尊のことばの意味をさとり、夢から覚めたように気がつき、わが子の冷たい骸むくろを墓所ほしよにおき、釈尊のもとに帰つてきて弟子となつた。

第四節 迷いのすがた

一、この世の人びとは、人情が薄く、親しみ愛することを知らない。しかも、つまらないことを争いあい、激しい悪と苦しみの中にあつて、それぞれの仕事を勤めて、ようやく、その日を過すごしてゐる。

立場の高下にかかわらず、富とみの多少にかかわらず、すべてみな金銭のことだけに苦し

む。なければないで苦しみ、あればあるで苦しみ、ひたすらに欲のために心を使つて、安らかなときがない。

富める人は、田があれば田を憂え、家があれば家を憂え、すべて存在するものに執着して憂いを重ねる。あるいは災いにあい、困難に出会い、奪われ焼かれてなくなると、苦しみ惱んで命までも失うようになる。しかも死への道はひとりで歩み、だれもつき従う者はない。

貧しいものは、常に足りないことに苦しみ、家を欲しがり、田を欲しがり、この欲しい欲しいの思いに焼かれて、心身ともに疲れはててしまう。このために命を全うすることができずに、途中で死ぬようなこともある。

すべての世界が敵対するかのように見える、死出の旅路は、ただひとりだけで、はるか遠くに行かなければならない。

二、また、この世には五つの悪がある。一つには、あらゆる人から地に這う虫に至るまで、すべてみな互いにいがみあい、強いものは弱いものを倒し、弱いものは強いもの

を欺あざむき、互いに傷つけあい、いがみあっている。

二つには、親子、兄弟、夫婦、親族など、すべて、それぞれおのれの道がなく、守るところもない。ただ、おのれを中心にして欲をほしのままにし、互いに欺きあい、心と口とが別々になっていて誠がない。

三つには、だれも彼もみなよこしまな思いを抱いだき、みだらな思いに心をこがし、男女の間に道がなく、そのために、徒党を組んで争い戦い、常に非道を重ねている。

四つには、互いに善い行為をすることを考えず、ともに教えあつて悪い行為をし、偽り、むだ口、悪口、二枚舌を使って、互いに傷つけあっている。ともに尊敬しあうことを知らないで、自分だけが尊い偉いものであるかのように考え、他人を傷つけて省みるところがない。

五つには、すべてのものは怠おこたりなまけて、善い行為をすることさえ知らず、恩も知らず、義務も知らず、ただ欲のままに動いて、他人に迷惑をかけ、ついには恐ろしい罪を犯すようになる。

三、人は互いに敬愛し、施しあわなければならぬのに、わずかな利害のために、互いに憎み争うことだけをしている。しかも、争う気持ちがおほんのわずかでも、時の経過に従つてますます大きく激しくなり、大きな恨みになることを知らない。

この世の争いは、互いに害そごないあつても、すぐに破滅に至ることはないけれども、毒を含み、怒りが積み重なり、憤いきしおりを心にしっかりと刻みつけてしまい、生をかえ、死をかえて、互いに傷つけあうようになる。

人はこの愛欲の世界に、ひとり生まれ、ひとり死ぬ。未来の報むくいは代わつて受けてくれるものがなく、おのれひとりですぐに当たらなければならぬ。

善と悪とはそれぞれその報いを異にし、善は幸いを、悪は災いをもたらし、動かすことのできない道理によつて定まつている。しかも、それぞれが、おのれの行為に対する責任をにない、報いの定まつているところへ、ひとり赴おもむく。

四、恩愛のきずなにながれては憂うれいに閉ざされ、長い月日を経へても、いたましい思

いを解くことができない。それとともに、激しい貪りむさぼにおぼれては、悪意に包まれ、でたために事を起こし、他人と争い、真実の道に親しむことができず、寿命も尽きないうちに、死に追いやられ、永劫えいごうに苦しまなければならぬ。

このような人の仕業しわざは、自然の道に逆らい、世間の道理にそむいているので、必ず災いを招くようになり、この世でも、後の世でも、ともに苦しみを重ねなければならぬ。

まことに、世俗の事はあわただしく過ぎ去ってゆき、頼りとすべきものは何一つなく、力になるものも何一つない。この中であって、こぞってみな快樂のとりことなっていることは、嘆かわしい限りといわなければならない。

五、このような有様が、まことにこの世の姿であり、人びとは苦しみの中にあつただ悪だけを行い、善を行うことを少しも知らない。だから自然の道理によって、さらに苦しみの報むくいを受けることを避けられない。

ただおのれにのみ何でも厚くして、他人に恵むことを知らない。そのうえ、欲に迫ら

れてあらゆる^{ほんのう}煩惱を働かせ、そのために苦しみ、またその結果によって苦しむ。

榮華の時勢^{じせい}は永續せず、たちまちに過ぎ去る。この世の快樂も何一つ永續するものはない。

六、だから、人は世俗の事を捨て、健全なときに道を求め、永遠の生を願わなければならぬ。道を求めることをほかにして、どんな頼み、どんな楽しみがあるというのか。

ところが、人びとは善い行為をすれば善を得、道になつた行為をすれば道を得るということを信じない。また、施せば幸いを得るということを信じない。すべて善悪にかわるすべてのことを信じない。

ただ、誤つた考えだけを持ち、道も知らず、善も知らず、心が暗くて、吉凶禍福^{きつきょうかふく}が次々に起こってくる道理を知らず、ただ、眼前に起こることだけについて泣き悲しむ。

どんなものでも永久に変わらないものはないのであるからすべてうつり変わる。ただこれについて苦しみ悲しむことだけを知っていて、教えを聞くことがなく、心に深く思

うことがなく、ただ眼前の快樂におぼれて、財貨や色欲を貪むさほつて飽あきることを知らない。

七、人びとが、遠い昔から迷いの世界を經へめぐり、憂うれいと苦しみに沈んでいたことは、ことばでは言い尽くすことができない。しかも、今日に至っても、なお迷いは絶えることがない。ところが、いまほし私の教しえに会い、私の名を聞いて信まずることができたのは、まことにうれしいことである。

だから、よく思いを重ね、悪を遠ざけ、善を選び、努め行わなければならない。

いま、幸いにも私の教しえに会うことができたのであるから、どんな人も私の教しえを信じて、私の国くにに生まれることを願ねがわなければならない。私の教しえを知った以上は、人は他人に従したがって煩わづら悩のうや罪悪ざいあくのとりこになつてはならない。また、私の教しえをおのれだけのものとするしることなく、それを実践し、それを他人に教しえなければならぬ。

第五章 仏の救い

第一節 仏の願い

一、人びとの生活は、すでに説いたように、その[＊]煩惱は断ちにくいものであり、また、初めもわからない昔から、山のような[＊]罪業をになつて、迷いに迷いを重ねてきている。だから、たとえ[＊]仏性の宝をそなえていても、開き現わすことは容易ではない。

この人間の有様を見通された[＊]仏は、はるかな昔に、ひとりの[＊]菩薩となり、人びとを哀れみ、あらゆる恐れを抱くもののために大慈悲者となろうとして、次のような数多くの願いを起こした。たとえ、この身はどんな苦しみの毒の中にあつても、必ず努め励んでなしとげようと誓った。

(a)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、わたしの国に生まれる人びとが、確かに仏と成るべき身の上となり、必ずさとりに至らないならば、誓つてさとりを開かないであろう。

(b)たとえ、わたしが仏ほとけと成ったとしても、わたしの光明に限りがあつて、世界のはし
ばしまで照らすことがないならば、誓つてさとりを開かないであらう。

(c)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、わたしの寿命に限りがあつて、どんな数で
あつてもかぞえられるほどの数であるならば、誓つてさとりを開かないであらう。

(d)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方の世界のあらゆる仏が、ことごとく
称讚しょうさんして、わたしの名前を称とえないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(e)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方のあらゆる人びとが眞実の心をもつて
深い信心を起こして、わたしの国に生まれようと思つて、十返べんわたしの名前を念じて、
生まれないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(f)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方のあらゆる人びとが、道を求める心を
起こし、多くの功德くどくを修め、眞実の心をもつて願いを起こし、わたしの国へ生まれよう
と思つているのに、もしもその人の寿命が尽きるとき、偉大な菩薩ぼさつたちにとりまかれて、
その人の前に現われないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(g)たとえ、わたしが仏ほとけと成つても、十方のあらゆる人びとが、わたしの名前を聞いて、わたしの国に思いをかけ、多くの功德くどくのもとを植え、心をこめて供養くようして、わたしの国に生まれようと思つているのに、思いどおりに生まれることができないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(h)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、わたしの国に来て生まれる者が、「次の生には仏と成るべき位」に到達しないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。ただし、自らの願いに従つて、人びとのために大いなる誓いの鎧よろいを身につけ、一切の世間の利益りやくと平安のために努力し、数多くの人びとを導いてさとりに入らせ、大悲の功德を修める者は、その限りではない。

(i)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、十方の世界のあらゆる人びとが、わたしの光明に触れて、身も心も和らぎ、この世のものよりもすぐれたものになるようでありたい。もしもそうでないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(j)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、十方の世界のあらゆる人びとが、わたしの名前を聞いて、生死にとらわれることのない深い信念と、さえぎられることのない深い

*智慧とを得られないようなら、誓つてさとりを開かないであろう。

わたしは、いま、このような誓いを立てる。もしもこの願いを満たすことができないようなら、誓つてさとりを開かないであろう。限りのない光明の主となり、あらゆる国々を照らして世の中の悩みを救い、人びとのために、教えの蔵を開いて、広く功德の宝を施すであろう。

二、このように願いを立てて、はかり知れない長い間功德を積み、清らかな国を作り、すではるかな昔に仏と成り、現にその極樂世界において、教えを説いている。

その国は清く安らかで、悩みを離れ、さとりの樂しみが満ちあふれ、着物も食物もそしてあらゆる美しいものも、みなその国の人びとの心の思うままに現われる。快い風がおもむろに吹き起こつて、宝の木々をわたると、教えの声が四方に流れて、聞くものの心の垢を取り去っている。

また、その国にはさまざまな色の蓮の花が咲きにおい、花ごとにはかり知れない花びらがあり、花びらごとにその色の光が輝き、光はそれぞれ仏の智慧の教えを説いて、聞

く人びとを仏の道に安らわせている。

三、いま十方のあらゆる仏たちから、この仏のすぐれた徳がたたえられている。

どんな人でも、この仏の名前を聞いて、信じ喜ぶ一念で、その仏の国に生まれることができるのである。

その仏の国に至る人びとは、みな寿命に限りがなく、また自らほかの人びとを救いたいという願いを起こし、その願いの仕事にいそむことになる。

これらの願いを立てることによって、執着を離れ、*無常をさとる。おのれのためになると同時に他人をも利する行為を実践し、人びととともに*慈悲に生き、この世俗の生活の足かせや執着にとらわれない。

人びとはこの世の苦難を知りつつ、同時にまた、仏の慈悲の限りない可能性をも知っている。その人びとの心には、執着がなく、おのれとか、他人とかの区別もなく、行くも帰るも、進むも止まるも、こだわるところがなく、まさに心のあるがままに自由であ

る。しかも、仏が慈悲をたれた人びととともにとどまることを選ぶのである。

だから、もしもひとりの人がいて、この仏の名前を聞いて、喜び勇み、ただ一度でもその名を念ずるならば、その人は大いなる利益を得るであろう。たとえこの世界に満ちみちている炎の中にも分け入って、この教えを聞いて信じ喜び、教えのとおりに行わなければならない。

もしも、人びとが真剣にさとりを得ようと望むなら、どうしても、この仏の力によらなければならぬ。仏の力がなくてさとりを得ることは、普通の人間のできるところではない。

四、いま、この仏は、ここよりはるか遠くのところにいるのではない。その仏の国ははるか遠くにあるけれども、仏を思い念じている者の心の中にもある。

まず、この仏の姿を心に思い浮かべて見ると、千万の金色に輝き、八万四千の姿や特徴がある。一つ一つの姿や特徴には八万四千の光があり、一つ一つの光は、一つ残らず、念仏する人を見すえて、包容して捨てることがない。

この仏を拝み見ることによって、また仏の心を拝み見ることになる。仏の心とは大い

なる慈悲じひそのものであり、信心を持つ者を救いとるのはもちろん、仏ほとけの慈悲を知らず、あるいは忘れていたような人びとをも救いとるのである。

信あるものには仏は仏と一つになる機会を与える。この仏を思い念ずると、この仏は、あらゆるところに満ちみちる体であるから、あらゆる人びとの心の中に入る。

だからこそ、心に仏を思うとき、その心は、実に円満な姿や特徴をそなえた仏であり、この心は仏そのものとなり、この心がそのまま仏となる。

清く正しい信心をもつものは、心が仏の心そのままであると思ひ描くべきである。

五、仏の体にはさまざますがたの相があり、人びとの能力に応じて現われ、この世界に満ちみちて、限りがなく、人の心の考えおよぶところではない。それは宇宙、自然、人間のそれぞれの姿の中で仰ぎ見ることができる。

しかし、仏の名を念ずるものは、必ずその姿を拜むことができる。この仏は常にふたりの菩薩ぼさつを従えて、念仏する人のもとに迎えに来る。仏の化身はあらゆる世界に満ちみ

ちているけれども、信心をもつ者だけが、それを拝み見ることが出来る。

仏の仮の姿を思うことさえ、限りない幸福を得るのであるから、眞実の仏を拝み見ることの功德には、はかり知れないものがある。

六、この仏の心は、大なる慈悲と智慧そのものであるから、どんな人をも救う。

愚かさのために恐ろしい罪を犯し、心の中では貪り、瞋り、愚かな思いを抱き、口では偽り、むだ口、悪口、二枚舌を使い、身では殺生し、盗み、よこしまな愛欲を犯すという十悪をなす者は、その悪い行いのために、永遠に未来の苦しみを受けることとなる。

その人の命の終わるとき、善い友が来てねんごろに、「あなたはいま苦しみが迫っていて、仏を思うこともできないであろう。ただこの仏の名を称えるがよい。」と教える。

この人が心一つにして仏の名を称えると、ひと声ひと声のうちに、はかり知れない迷いの世界に入る罪を除いて救う。

もし人が、この仏の名を称えるならば、永遠に尽きることのない迷いの世界に入る罪をも除くのである。ましてや一心に思うに至つては、なおさらのことである。

まことに念仏する人は、白蓮華びやくれんげのようになすばらしい人である。慈悲じひと智慧ちえとの二菩薩ぼさつはその友となり、また、常に道を離れることなく、ついに浄土に生まれることになるであろう。

だから、人びとはこのことばを身につけなければならぬ。このことばを身につけるということは、この仏の名を身につけることである。

第二節 清らかな国土

一、この*仏はいま、現にいて、*法を説いている。その国の人びとはみな苦しみを知らず、ただ楽しみの日のみを送るので、極楽ごくらくというのである。

その国には七つの宝でできた池があり、中には清らかな水をたたえ、池の底には黄金の砂が敷かれ、車の輪のように大きい蓮華れんげが咲いている。その蓮華は、青い花には青い

光が、黄色の花には黄色の光が、赤い花には赤い光が、白い花には白い光があり、清らかな香りをあたりに漂ただよわせている。

また、その池の周囲のあちこちには、金・銀・青玉・水晶の四つの宝で作った楼閣ろうかくがあり、そこには大理石で作った階段がある。また、別の場所には池の上につき出た欄干らんかんがあり、宝玉ほうぎょくで飾られた幕で取り囲まれている。また、その間にはよいにおいのする木々や花がいつぱいに咲いた茂みがある。

空には神々こうじゅうしい音楽が鳴り、大地には黄金の色が照り映えて、夜昼六度も天の花が降り、その国の人びとはそれを集め花皿に盛って、ほかのすべての仏国へ持ってゆき、無数の仏ほとけに供養する。

二、また、この国の園には、白鳥、孔雀くじゃく、おうむ、百舌鳥もず、迦陵頻伽かりようびんがなど数多くの鳥が、常に優雅ゆうがな声を出し、あらゆる徳と善とをたたえ、教えを宣布せんぷしている。

人びとはこの声を聞いて、みな仏を念じ、教えを思い、人の和合を念ずる。だれでも

この声の音楽を聞くものは、ほとけ仏の声を聞く思いがし、仏への信心を新たにし、教えを聞く喜びを新たににして、あらゆる国の仏の教えを受ける者との友情を新たにする。

そよ風が吹き、宝の木々の並木をよぎり、輝く鈴をつけた網に触れると、微妙な音を出し、一時に百千の音楽がかなでられる。

この音を聞く者は、また自然に仏を念じ、教えを思い、人の和合を念ずるようになる。その仏の国は、このような功德くどくと美しい飾りとをそなえている。

三、どういうわけで、この国の仏は無量光仏、無量寿仏と名づけられるのであろうか。かの仏の光は量はかることができず、十方の国々を照らして少しもさえぎられない。またその寿命も限りがないから、そう名づけるのである。

そして、その国に生まれる人びとも、みな、ふたたび迷いの世界にもどらない境地に至り、その数はかぞえ尽くすことができなからである。

また、この仏の光ほとけによって新しい命に目覚める人びとの数は無量だからである。

ただ、この仏の名を心に保ち、一日または七日にわたって、心を一つにして動揺することがないならば、その人の命が終わるとき、この仏は、多くの聖ひじりたちとともに、その人の前に現われる。その人の心はうろたえることなく、ただちにその国に生まれることができる。

もし人が、この仏の名を聞き、この教えを信ずるならば、仏たちに守られ、この上もない正しいさとりを得ることができるのである。

